

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17720163
 研究課題名（和文） 長崎から見た異文化認識の研究 ― 寛文～享保期の「長崎旧記類」―
 研究課題名（英文） Historical and literary study of cross-cultural cognizance
 Through the “Nagasaki Kyukirui” in the Kanbun-Kyoho period
 研究代表者
 位田 絵美（INDEN EMI）
 北九州工業高等専門学校・総合科学科・准教授
 研究者番号：30353345

研究成果の概要：本研究の目的は、「長崎旧記類」の調査を通じた近世異文化認識の解明である。「長崎旧記類」には為政者側ではない民衆の視点で異文化情報が記載されており、その分析は対外認識研究では極めて重要な論点である。本研究では、長崎の民衆の異国観・自国観を、「長崎旧記類」を通じて分析した。その結果、為政者側の意図とは異なる視点で記述された「異国船焼討」や「島原の乱」の記事には、近世の長崎民衆の認識が反映していることを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	147,540	0	147,540
2006年度	552,460	0	552,460
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,700,000	150,000	1,850,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本近世史・異文化認識・対外情報・長崎旧記類・史実の物語化

1. 研究開始当初の背景

近世史研究における対外関係史は、近年特に注目を集めている。なかでも異文化認識については為政者側から見た認識だけでなく、複数の視点から捉えた認識を分析する必要性が叫ばれている。

筆者は、これまで近世のベストセラー作家の小説をもとに、そこに表れた大坂商人の眼から見た対外認識の解明を行ってきた。すでにその検証は、『歴史評論』『文学研究』『国文学解釈と鑑賞』などに掲載され、高く評価

されている。

文学をもとに対外認識を分析する研究は、近年少しずつ行われているが、その大半が刊行された資料をもとにしている。そこで本研究では、新たに未刊の写本群「長崎旧記類」（以下、「旧記類」）を研究対象にとりあげることにした。

「旧記類」には、公文書にはない民衆レベルの多彩かつ重要な記述が収録されているが、諸本の整理が難しく、内容も多岐に亘るため、従来の先行研究では看過されてきた。しかし、近世の長崎の民衆から見た異文化認

識の解明は、今後の対外認識研究で重要な論点となることは明らかで、本研究ではその解明に重点をおいている。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえて、本研究では以下の7項目をおもな研究目的とする。

- (1)全国に散見する、長崎の民衆の手による異文化情報を集録した写本群「旧記類」を調査・収集し、当時の時代背景と絡めて、収録記事の内容によって系統分類を行う。
- (2)未翻刻本の多い「旧記類」を翻刻し、広く研究に活用できるようにする。また具体的な記事内容から、出来る範囲で、執筆者・編者が不明である「旧記類」の、執筆者・編者の推定を行う。
- (3)同系統の「旧記類」の記載記事が、時とともに増補・削除されていく過程を追い、長崎民衆の異文化に対する認識がどのように変化していたのかを考察する。
- (4)「旧記類」の具体的な記事内容から、長崎から見た異国人像や対外認識を抽出し、為政者側の意識とどのように異なるかを比較分析する。
- (5)「旧記類」の具体的な記事内容を、大坂商人の眼から見た異文化認識や、漂流記に見られる異国像等と比較することで、長崎がもつ特殊性・普遍性を明らかにする。
- (6)(1)~(5)を踏まえて、これまで雑記に分類され、高い評価を得ることがなかった写本群「旧記類」の歴史的な意義を確立させる。

3. 研究の方法

研究目的に基づき、以下の手順で研究を行った。

- (1)長崎市内および島原半島・天草地方の図書館・資料館を中心に、東京・京都・大阪・名古屋といった都市の図書館・資料館が所蔵する「旧記類」の調査・収集を、精力的に行う。
- (2)収集した資料を翻刻し、その内容によって大まかに分類を行う。また、翻刻した資料は、書誌学的な学術雑誌等に投稿し、研究に活用できるようにする。
- (3)ほぼ同じ時代（元禄～享保）に執筆され、重複する記事を記載する4種の「旧記類」

（具体的には『長崎拾芥』・『崎陽雑記』・『長崎根元記』・『長崎始原記』）をとりあげる。そこに記載される内容を比較・分析し、時代が下がるにつれて見られる傾向を確認する。

- (4)有馬修理太輔の「異国船焼討」記事や、我が国最大のキリシタン一揆といわれる「島原の乱」に関する記事に注目し、上記の4種の「旧記類」が、それらをどのように記述しているかを詳細に分析する。その上で、相違点・共通点を確認し、そこに表れた長崎民衆の異国認識や自国認識を考察する。
- (5)(4)に表れた傾向は、同時代のベストセラー小説や漂流記に見られる異国認識・自国認識と共通するのか、異なるのかを、井原西鶴の小説や漂流記を使って確認する。
- (6)(1)~(5)の作業を踏まえ、「旧記類」の歴史的・文学的価値を考察し、その成果を学術雑誌に投稿し、学会等で発表する。

4. 研究成果

研究成果は、以下の通りである。

- (1)「旧記類」の調査・収集・翻刻作業を通じて、ほぼ同時代に成立し、重複する記事を記載する4種の「旧記類」（具体的には『長崎拾芥』・『崎陽雑記』・『長崎根元記』・『長崎始原記』）を研究対象に取りあげた。それらの記事内容を比較した一覧を作成し、同一記事が繰り返し採録される過程で少しずつ変化し、増補・削除が行われていることを確認した。
なかでも、時代が元禄～享保へ下がるに従って、次の2点が増補される傾向があることが判明した。
 - ①異国人や異国人の漂着に関する記述
 - ②「島原の乱」に関する記述
- (2)(1)で得た傾向をもとに、まず「異国船の来航と焼討事件」の記事に焦点を絞り、4種の「旧記類」の比較分析を詳細に行った。分析の結果、「旧記類」の成立背景には、従来の先行研究では看過されてきた長崎の民衆の意識が、反映されていることが判明した。その特質は以下の3点にまとめることができる。
 - ①「旧記類」の記事の執筆・採録には、江戸から下向した長崎奉行所の役人ではなく、代々長崎に住みつてきた地役人たちが、深く関与していたと考えられる。
 - ②従来の研究では、「旧記類」は、「長崎奉行所の方針やキリシタンの厳禁・鎖国・

国防を主眼として編集されている」と言われてきた。しかし、本研究の分析によって、そうではないことが判明した。即ち、「旧記類」の中には、一概に「奉行所の方針やキリシタンの厳禁・鎖国・国防」を目的に編集されたとは考えられない『崎陽雑記』や『長崎始原記』等が存在することが明らかになった。

③当時の長崎の民衆たちは、江戸幕府（為政者側）が持っていた「海は国防の為の防壁」という意識とは別の、「海は異国へ繋がる道」という意識を持っていたと考える。

(3)続いて「島原の乱」に関する記事に焦点を絞り、4種の「旧記類」の比較分析を詳細に行った。分析の結果、元禄～享保期の「旧記類」の著編者たちが、それよりさらに50年～80年ほど前に起きた我が国最大のキリシタン一揆をどのように認識していたかが明らかになった。その具体的な内容は以下の3点である。

①4種のうち『崎陽雑記』・『長崎始原記』には、それまでの「旧記類」にはない、「島原の乱」の一揆側の指導者である山田右衛門作（以下、右衛門作）の記事が採録されていることが判明した。

②右衛門作記事の採録は、一個人の取調べ調書の書写ではなく、文学・歴史学史上に極めて重大な意義をもたらしている。即ち、本来なら、右衛門作記事は、その特殊性から公的機関に埋蔵されるはずの文献であったが、「旧記類」の著編者たちが右衛門作記事を採録したことで、その記録が現代まで受け継がれることができた。

③著編者は、感情を交えることなく、一揆の非情な現実を淡々と伝え、彼らが客観的かつ公平な態度を貫くことで、これらの「旧記類」記事は為政者側の摘発を逃れ、また後世の多くの読者から信頼され、文学・歴史学的価値を醸成する結果となっている。

(4)(1)～(3)を通じ、4種の「旧記類」には、収録記事の内容と時代背景等と絡んで、官撰書『長崎根元記』対、民衆側が編纂した『崎陽雑記』・『長崎始原記』等の構図があることが判明した。

(5)「旧記類」に表れた異国観・自国観と比較するため、漂流記の異国情報を分析・考察した。具体的には、「旧記類」に及ぼした影響を考え、寛永21(1644)年に起きた韃靼漂流事件に焦点を当て、口書『韃靼漂流記』と、その史実を物語化した小説『異

国旅すゞり』を取りあげた。両書の内容を比較分析することで、史実がどう物語化されたのか、また、付与された情報から、当時の長崎以外の民衆の意識はどのようなものであったかを分析し、考察を行った。分析の結果、以下の3点が明らかになった。

①『異国旅すゞり』は、従来『韃靼漂流記』の最初の刊本とされてきた『朝鮮物語』よりも早い正徳～享保年間の成立で、これまでの研究史上では看過されてきた存在であることが判明した。

②口書の物語化の過程で、現実味のある会話の増補・時間の流れの修正・具体的な体験談が増補され、当時の民衆がどのような異国情報に興味を持っていたかが明確になった。

③『異国旅すゞり』には、為政者側が意図した武威を誇り、ナショナリズムの台頭を意識させるような記述は見当たらず、町人が御伽感で、異国への友好・憧憬の意識を抱いていたことが示されていた。

(6)以上の成果を通じて、「旧記類」に記載される異国観・自国観には、長崎という特殊な町が生み出した独自の認識が含まれることが判明した。今後は、「旧記類」の史的・文学的価値をより明確にするために、さらにその他の収録記事にも着目し、分析を詳細に進めていく必要があることが明らかになった。

江戸時代の人々の異国観・自国観には、元禄～享保期を境に、大きな変化が見られる。それまでは幕府の強力な指示のもと、民衆は異国情報に興味を持ちながらも、それらを記述し、読むことが憚られていた。しかし元禄～享保期を境にその垣根は低くなり、民衆は意識的に好んで異国情報を記述し、読むようになっていく。当然ながら「旧記類」の記事の変遷も、この流れの中に位置している。

この傾向は、当時流行した紀行文と何らかの相関性があるように思われるが、その詳細な分析は、今後、同時代の漂流記や紀行文のさらなる分析を経た上で、検討してゆきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 位田絵美、『異国旅すゞり』について—書誌分析と韃靼漂流事件の物語化の事例分析—、『近世初期芸芸』、第25号、17

- ～27 頁、2008 年、査読有
- ② 位田絵美、「長崎民衆が想う「島原の乱」
－「長崎旧記類」の山田右衛門作記事を
めぐって－」、『文学研究』、第 95 号、82
～95 頁、2007 年、査読有
 - ③ 位田絵美、「映し出される長崎民衆の意識
－「長崎旧記類」に見る異国人来航記事
と異国船焼討記事－」、『文学研究』、第
94 号、57～66 頁、2006 年、査読有
 - ④ 位田絵美、「元禄～享保期における異国へ
の関心－「長崎旧記類」を比較して－」、
『文学研究』、第 93 号、80～91 頁、2005
年、査読有

〔学会発表〕(計 1 件)

- ① 位田絵美、「漂流記に見る史実と文学－
『異国たび硯』を中心に－」、名古屋歴
史科学研究会、2007 年 3 月 17 日、名古
屋大学

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

位田 絵美 (INDEN EMI)

北九州工業高等専門学校・総合科学科・准
教授

研究者番号：30353345

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：